

書 評

西川杉子著

『ヴァルド派の谷へ

——近代ヨーロッパを生きぬいた異端者たち——』

山川出版社 2003 年刊

金 野 圭 子

「ヴァルド派」と聞いて、現在の日本人のうち、果たしてどのくらいの人が「少なくとも名前だけは聞いたことがある」と思うであろうか？ かりに「中世異端の1つ」としての認識があったとしても、12世紀末に始まるこの信仰グループが異端審問や度重なる弾圧を受けつつも現代まで生き抜いてきたことは、歴史学に携わる人々の中においてすら十分な認知を得ているとは言えない。わが国におけるヴァルド派研究書・論文には、今野國雄氏や神崎忠昭氏などによる優れたものがこれまでにあったにせよ、それらの絶対量が少なく、通史的なものは皆無と言ってよい状況であったから、それも無理はなかろう。そういう中で本書は、日本では殆ど知られていなかった近世以降現代まで及ぶヴァルド派史を中心に扱っているのであり、本書が刊行された意義は大変大きく、まことに喜ばしいことである。

* * *

「ヴァルド派の谷」（以下「谷」と略記）とは日本人には馴染薄いが、フランス～イタリア間のアルプスの麓に広がるピエモンテの谷地域の通称で、ヴァルド派の人々が弾圧の歴史を生き抜き、今なお残っている地域である。

そもそもヴァルド派とはいかなる人々であったのか？ 端的に言えば、彼らは中世には異端と呼ばれたが、「原プロテスタント」と見なされ得る

特徴をも有していたがゆえに、宗教改革後はプロテスタントに合流することを受け入れ、現代まで生き抜いてきた人々である。

その特徴は、本書でも著者が中世ヴァルド派の「過去」の記憶で特に重要なものとしてあげている以下の2点で、第一に彼らが聖書を愛し、それに忠実に従って生きようとする「聖書の民」であったということ、第二にローマ＝カトリック教会とは別個に、使徒の時代以来「真の教会」を継承してきたという伝承を有していたことである。なお、第一の点は歴史的事実だが、第二の伝承自体はフィクションにもかかわらず、ヴァルド派内外に「事実」と信じられ、「歴史化した」ものである。

第一の点について：

ヴァルド派運動は中世盛期、キリスト教が民衆レベルまで浸透するのに伴い盛り上がってきた、一般信徒主体の「^{ラ イ チ}使徒的生活」を理想とする福音主義運動の1つと位置づけられる。12世紀末、リヨンの富裕な商人ヴァルデスが創始者と言われ、彼は吟遊詩人の歌う聖人伝を聴いたことを契機として改心に至った。「使徒的生活」を文字通り実践せんとの熱意に燃えた彼は、ラテン語を知らず聖書を読めなかったので、知人の聖職者に福音書等の口語訳を依頼して——この時代、聖書の口語訳自体が違法であった。その理由には、翻訳とは解釈であるから翻訳を通して誤謬が入り込むことを教会当局が恐れたこともある——それを暗記し、全財産も放棄して、福音書のキリストや使徒たちに文字通りに従う清貧と巡歴説教の生活に入った。教義上の問題というより寧ろ、無資格の説教活動を禁止されたにもかかわらずそれに固執したために、ヴァルデスとその同志はリヨンを追放され、^{ア ナ テ マ}教会分裂者との宣告を受けた。しかし、彼らの運動はヨーロッパ各地に広がっていくこととなった。

実際、ヴァルド派の行く所では彼らの口語訳聖書の存在が報告されており、仏語系での史上初の口語訳聖書はヴァルド派のものであることがわかっている。現存するヴァルド派口語訳聖書の写本断片は、仏語系のものだけでも12種を数える。

しかし、口語訳聖書を持っていたのはごく一部の指導者層のみで——彼らはバルバ（“おじさん”の意）と呼ばれたヴァルド派コミュニティを巡回する説教者であった——、殆どの人々は夜間、密かに集まって聖句を丸暗記する方法で聖書に親しんだ。中には「ヨハネによる福音書」を全

て暗唱できる少年もいたという。彼らはこの集会を「学校」と呼んでいた。(ヴァルド派の教育熱心は、運動当初からの伝統と言えよう。)

やがて宗教改革が始まると、1532年、ヴァルド派のシャンフォラン会議においてスイス改革派への合流が決議され、同時に旧約・新約聖書全巻をヘブライ語・ギリシア語原典から初めてフランス語に翻訳・出版することも決議された。その翻訳作業を委託されたのはカルヴァンの従兄弟オリヴェタンで、それに関わる一切の資金調達を担ったのがヴァルド派であった。彼らは皆貧しい人々であったが、この聖書刊行のために、福音書に登場する貧しい寡婦のごとくなけなしの献金を差し出したのである。そして、1535年にはその出版が実現した。これが世に言う『オリヴェタン聖書』であり、ルターのドイツ語訳聖書と同様に、フランス語訳聖書史上、非常に重要なものである。

第二の点について：

著者が紹介している伝承では、この「谷」はパウロの直接伝道を受けた信徒たちがローマ帝国による弾圧を避けて亡命して来た場所で、ヴァルド派はその信徒たちの子孫であり、中世期に腐敗してしまったローマ教会とは別に、父子孫々この「谷」で「真の教会」を守ってきたと伝えられている。だが本書では紹介されていない別の伝承もある。それは、教皇シルヴェステル1世がローマ皇帝コンスタンティヌス1世より寄進を受けて政治権力との癒着が生じ、教会が清貧を忘れて墮落した。教皇にその誤りを指摘して追放された人物が人里離れた山中に行き「真の教会」を伝え、それを受け継いできたのがヴァルド派の人々である、というものである。どちらにせよ、この「谷」でヴァルド派こそが原始キリスト教会を継承してきた者である、という点では共通した伝承である。

これら2つの特徴は、信仰の原点回帰を目指すプロテスタント運動が求めるものと重なっており、いざ宗教改革が起こると、それまでのヴァルド派が有していた伝統・信仰内容に放棄・変更を迫られる部分があったにせよ、彼らのプロテスタントへの合流を可能としたわけである。

* * *

さて前置きが長くなったが、本書の内容紹介に移ろう。全体として文章は平易で読みやすく、そして面白い。著者の言葉を借りれば「足で稼いだ」現地取材ならではのイキの良さが随所に感じられるからであろう。

写真・地図・図版等も多く、紀行文のような趣もある。

第1章「異端者たちとの出会い」は、著者が英国留学中の博士論文作成過程でヴァルド派の問題に出会い、「谷」へのツアー旅行に参加した経緯から始まる。そして12世紀末におけるヴァルド派の起源と中世ヴァルド派の有していた2大特徴、即ち、聖書主義と上述の伝承に基づいた「谷」への彼らの特別な愛着があげられる。プロテスタントへ合流した後もヴァルド派には苦難の歴史が続くが、これらの特徴ゆえにヴァルド派の人々自身も不屈の精神で自分たちの信仰を守ることができ、外部のプロテスタント諸勢力もヴァルド派への支援を行っていくことになったわけで、本書の中心テーマの前提が説明されている。

第2章「栄光の帰還」では、一時的に「谷」を追われていたヴァルド派による「谷」への帰還とその後の「谷」の再建、それに際してのプロテスタント諸勢力（特にイングランド）との密接な関係が、ヴァルド派教会会議の議事録などの史料を用いつつ、描き出される。

元来「谷」は大部分、フランスの衛星国のような立場にあったサヴォイア公国の領内にあり、カトリック擁護の立場をとるフランス王ルイ14世の圧力で、1686年に領内のヴァルド派は「谷」から追放されていた。しかし、名誉革命の勃発（1688）でイングランドとフランスが戦争状態となった機に乗じ、ヴァルド派や同行の亡命ユグノーたちは亡命先のスイス方面からアルプスを越え、「谷」の武力奪還を見事に果たした。この出来事をヴァルド派は誇らしく「栄光の帰還」と呼び、他のプロテスタント諸国でもこれは英雄的行為と受けとられた。

この後、確かに彼らはこの「谷」で再び生活し、彼らの礼拝もできるようにはなったが、逆にここは彼らの強制居住区域ともなった。彼らは税制その他様々な面で差別を受け続けながらも、「谷」の再建に着手する。これにはイングランドやオランダなどプロテスタント諸勢力が様々な援助を行っていくのだが、それはヴァルド派に対する宗教的連帯感からだけでなく、地中海側からフランスに圧力をかけるための軍事戦略上の必要からでもあった。また、援助の一環には、ヴァルド派子弟の成績優秀者をスイスの神学校やドイツ、オランダ、イングランドの大学に奨学金付きで迎えるというものもあり、「谷」の一族、アッピ家の兄弟シプリアンとポールは、この制度によりイングランドへ送られることに

なった。

第3章「プロテスタントの環」では、18世紀、プロテスタント諸勢力によるヴァルド派支援の高まりとその衰退について語られる。

ヴァルド派の命運は、「栄光の帰還」後もサヴォイア家の対フランス政策が二転三転するたびに左右され、苦難は続いたが、18世紀前半には、イングランド等から莫大な義捐金が寄せられ、ドイツからは亡命ユグノーやヴァルド派が受け入れられ、三十年戦争での荒廃地や東北部の未開墾地ではあったものの、彼らに土地が与えられる等の支援が続いた。

一方、シプリアンとポールはオックスフォード大学で学び、イングランド国教会の聖職者に叙任されるまでになる。後に2人は「谷」に戻ってヴァルド派聖職者として再叙任されるが、彼らの執り行う礼拝はイングランド国教会的でカトリック典礼に似ているとの非難が起こるほどであった。しかし、バックにイングランドがついている彼らの立場は揺るがなかったし、逆に言えば、それだけ「谷」におけるイングランドの影響力、その支援の力は大きいものであった。

ところが18世紀後半、イングランド国内でジャコバイト勢力が後退するとプロテスタント勢力が穏健化し、大陸プロテスタントへの関心自体も徐々に薄れていく。そこにフランス革命が勃発し、「谷」の制圧権は、サヴォイア家に代わってフランス、ロシア、オーストリアへと移っていった。これらの国々はサヴォイア家よりも寛容にヴァルド派を取り扱い、特にナポレオンは「ゲットー」外での礼拝も許可するほど好意的であったが、ナポレオン領となった「谷」にはイングランド・オランダからの送金は途絶え、ヴァルド派は困窮に追い込まれる。ナポレオン失脚後はサヴォイア家による支配と抑圧が復活し、諸外国からの援助も多少は復活したが、大した盛り上がりもなく、「谷」は忘れ去られたかに見えた。

第4章「よみがえった記憶の谷」では、イギリスで衰退していたヴァルド派への関心や支援が、1823年出版のギリ―による「谷」の紹介本によって復活したことが語られる。これには、自由主義の波が押し寄せる中でイギリスにおけるカトリック教徒の解放が進む一方、プロテスタント側にも危機感が高まったことが背景にあった。

しかし自由主義の波は、また違った形でも「谷」に押し寄せた。1848年2月17日、サヴォイア家当主カルロ＝アルベルトにより、ヴァルド派

に「ゲットー」からの解放が告げられたのである。これにはイギリス人のヴァルド派支援者も舞い上がり、イタリアのプロテスタント化を企図するほどであったし、^{リッソルジメメント}イタリア統一運動を推進するカヴールもヴァティカン勢力の抑制を狙ってこれを容認した。結果的にはイタリアのプロテスタント化は進まなかったが、この解放令がヴァルド派のイタリア世界へ入っていく契機となったのは事実であった。

なお、19世紀半ばには、ヴァルド派のパウロ伝道起源説はほぼ否定されていたが、ヴァルド派が聖書を頼りに、勤勉と儉約を通して生活を築いてきた姿はイギリス人のプロテスタント的倫理に訴えるものであり、イギリス人のヴァルド派支援に変わりはない。今尚イギリスだけでなく国外のプロテスタント諸教会によるヴァルド派支援は続いている。

イタリア国内でも19世紀末以降、『クオーレ』の著者デ＝アミーチスによるヴァルド派の紹介が功を奏し、ヴァルド派の存在が広く知られるようになる一方、ヴァルド派の側でも「イタリア化」を進めるようになっていったのである。

* * *

以上の要旨を概観するだけでも、ヴァルド派が歴史の大きなうねりに翻弄されながらも、彼らの不屈の精神とプロテスタント諸勢力からの援助を受けて、生き抜いてきたことが良くわかるであろう。

そもそも著者の専門は名誉革命体制下のイングランド政治社会であるが、それを汎ヨーロッパ的な空間の中で位置づける試みの中で、ヴァルド派に関わるプロテスタント＝ネットワークに気がついた、という。

本書は、「栄光の帰還」以降「谷」で、ヴァルド派がヨーロッパのプロテスタント勢力と関わりながら、どのように生き残ってきたかの歴史を扱っている。その際、著者が目をつけたのは、イングランドで教育を受け、生涯イングランドと深い関わりを保ち続けたシプリアンとポールのアップピア兄弟であり、彼らを通して、ヨーロッパのプロテスタント世界と連携しながら生き残って来たヴァルド派の姿を描き出す、という著者の題材選びやアプローチ方法は実に巧みだ。一次史料も多く活用されており——紀行文的な著述は、自分の足を使ってそれらの史料に出会うという歴史学の愉しみも、読者に味わわせてくれるものである——、本書は宗教改革以後のヴァルド派の概説史として優れたものである。

また逆に、ヴァルド派を通してヨーロッパ世界を見る上でも、本書は新しい地平を示すのに成功している。ヨーロッパでは一般に宗教戦争の時代は17世紀前半で終わり、18世紀は啓蒙主義、つまり宗教より理性優先の時代であったように受け取られて来た。しかし、特に17世紀末から半世紀間のヴァルド派とプロテスタント諸勢力との強力な連携ぶりは、「ヨーロッパ世界をプロテスタント勢力圏とローマ・カトリック勢力圏とに分けて見る、宗教的イデオロギーの冷たい戦争は続いていた」ことを示しており、新しい18世紀像の構築を予感させるものである。

一方、多少気になった点をあげるとすれば、第一に、中世ヴァルド派の有していた宗教改革の先駆的要素が強調されるあまり——とはいえ、それゆえにヨーロッパのプロテスタント＝ネットワークが活発に機能したことは歴史的事実なのであるが——、本書全体のトーンがヴァルド派的・プロテスタント的視点に寄っている感が否めないことである。著者はヴァルド派やプロテスタントの人々の生の声を取材しており、それが本書の大きな魅力なのだが、どうしてもそれに引っ張られたのかもしれない。

正直なところ、本書全体を読んだ印象として、副題は「ヨーロッパ近代を生きぬいた異端者たち」というより「…異端の末裔たち」という方がよりふさわしいように評者には思われた。なぜなら、著者の目に映っているヴァルド派は宗教改革側への合流後のヴァルド派、つまり「中世異端ヴァルド派の末裔である仏系プロテスタント」であるから。その前史をも含めたヴァルド派史の全体像は——それを描くことが本書の主目的ではないことは承知の上だが——、本書からはかえって掘み難くなっている面もある。実際、本書を読む限りでは、なぜヴァルド派が「異端者たち」であったのかということは判然としないのではないだろうか。

ヴァルド派史には、スイス改革派への合流を決議したシャンフォラン会議を境として、明らかな断層がある。ヴァルド派は当初は、教義的には従来の教会に従っていたのだが——^{ローマ＝カトリック}ヴィケール氏のように、ヴァルデス自身は従順なカトリックとして死んだであろう、と述べる研究者もいるほどである——、教会から締め出され、異端審問の追及を受ける中で急進化し、時代的・場所的に程度の差こそあれ、反教皇主義、反聖職者主義、煉獄の否認、宣誓の拒否、カタリ派の誤謬等々が混入していった。

実際、15世紀半ばに捕えられたバルバ見習いの審問記録は、中世ヴァルド派の信仰内容に処女降誕の否認やイエスの聖性についての曖昧さ等が現れていたことを示しており、彼らに単なる反カトリック的要素のみならず教義的異端化が見て取れる。また、シャンフォラン会議決議文の内容には、中世ヴァルド派が有していた異端的要素・(尚も残存していた)カトリック的要素の放棄、並びにスイス改革派的要素の受容が明示されており、中世ヴァルド派の終焉とプロテスタントの1グループに変容しての再出発が認められる。上述の事柄は著者の中心テーマとは直接的には関わらないかもしれないが、これらを含めた教会史全体への地平を備えておくことは重要であろう。その点の希薄さが具体的な著述に現れている部分があり、例えば、第1章中でヴァルド派の破門理由を「もっぱら彼らの厳格な聖書主義」とする説明は適当とはいえず、寧ろここは、当時の教会において一般信徒の説教活動が聖職侵害と見なされ、度々の禁止にもかかわらずそれに従わなかったため、と言うべきであろう。これについては、異端ないし民衆的な福音主義運動に対する教会の対応策の歴史、特にグレゴリウス改革以降インノケンティウス3世による大転換に至るまでの流れをふまえることが必要である。ヴァルド派史の邦語文献が少ない中、本書は大いに読まれるべきものであるからこそ、細部にわたってより入念な記述が望まれる。

第二に、言語に関する問題がある。「谷」内部の地名に関して、現在この地はイタリア領であるのに、著者は基本的に仏語に準じたカタカナ表記を行っている。この地域の歴史的・文化的背景、さらに著者の扱った時代を考慮し、敢えてこの表記方法を選んだことは理解できる。しかもヴァルド派の仏語使用は、彼らのヴァルド派への所属感を強め、かつアイデンティティを守るため、1848年の「ゲットー」からの解放以後も長らく残ったヴァルド派の象徴でもあったから尚更であろう。現在でも土地の高齢者同士が話す方言は仏語と伊語の混合語であり、評者もトッレ=ペッリーチェに約1年間滞在していた際、初めて耳にした時には面食らい、そして興味深く思ったものである。この地の高齢層の人々の中には、子供時代に家庭では仏語を使っていたため、今なお仏語により親近感を持つ人たちも存在する。また、現在でもトッレ=ペッリーチェのヴァルド派教会では、7・8月に限り、月の最終日曜の礼拝を仏語で行っ

ている。

しかし、ヴァルド派の「イタリア化」はイタリア他地域とのコミュニケーション上、またイタリアにおけるプロテスタント伝道上、ヴァルド派史研究の発展上も、19世紀末頃ヴァルド派内部からも要請され始め、仏語・伊語併用期を経て、伊語使用は確実に定着・拡大していった。例えば、ヴァルド派歴史協会発行の年会誌では、協会名を1931年以降はSocietà di Studi Valdesiと伊語に変更したし、ヴァルド派解放を記念して毎年発行される『2月17日』というパンフレットでも1936年以降は仏語版を廃止して伊語版のみとなっている。現在、この地で売られている新聞・雑誌・書籍等は当然みな伊語であるし、ヴァルド派の経営する中学高等学校の学校教育も完全に伊語で行われているのだから、若年層なら尚のこと、もはや仏語が母語と言える状況ではない。「終戦とともに谷はフランス語圏に戻り、…今でも人々の母語はフランス語とされている」という著者の記述はもはや言い過ぎのように思われる。「谷」は、イタリアの中でもなるほど特異な地域ではあるが、ここでの「イタリア化」が確実に進んだことは指摘しておきたい。

本書を読み、評者は「神は細部に宿りたもう」という言葉を思い起こした。ヴァルド派は確かにマージナルな存在で、今まで歴史の細部としてあまり脚光をあびてこなかった。そこに本書という通史的ヴァルド派史が著されたこと自体が喜ばしいのに加え、ヴァルド派を通して新たにヨーロッパのプロテスタント＝ネットワークが見えてきたわけである。歴史研究の面白さは、案外こういう細部にあるのかもしれない。また、今日は情報収集が格段に容易になった時代ではあるが、本書は、歴史学においても「現場に赴く」ことの重要さを教えてくれている。本書の刊行を契機に、今後一層ヴァルド派研究が進展することを期待するものである。